石川 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No.145
2023.11.29

佐々木泉玄筆
「蓮湖真景之図」（東岸）

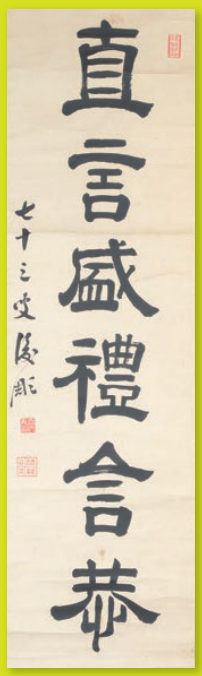
企画展 れきはくコレクション2023

令和5年12/16(土) ▶ 令和6年1/21(日)

企画展

れきはくコレクション2023

Rekihaku collection



前田斉泰書幅

鈴木華邨筆「紫式部」

鈴木華邨筆「松蔦之図」

石川県立歴史博物館では、石川県の歴史・文化に関わる資料を体系的に収集していますが、その大部分は県内外の皆様からの寄附によるものです。令和５年には一覧表のとおり260点の資料を新たに収蔵することができました。ご寄附に対する感謝の意を表して、新収蔵資料を一堂に公開いたします。

ここでは新収蔵資料のなかでも、特に注目される「蓮湖真景之図」を解説し、そのほかの資料についても一部ではありますが、写真にてご紹介します。

最後になりましたが、貴重な資料をご寄附いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

令和５年12/16(土)〜令和６年1/21(日)　9:00-17:00
※展示室への入館は16:30まで

令和５年12月28日(木)〜令和６年１月３日(水)は休館

【会場】石川県立歴史博物館 企画展示室

観覧料　一般／300円(240円)　大学生・専門学校生／240円(190円)　高校生以下無料
※(　)内は20名以上の団体料金／65歳以上は団体料金
上記の料金で常設展もあわせてご覧いただけます

「蓮湖真景之図」(東岸)

「蓮湖真景之図」(西岸)

蓮湖真景之図 ２巻 佐々木泉玄

蓮湖とは、県内一大きな潟である河北潟の別名である。本作は加賀藩御抱絵師である佐々木泉玄（1805〜79）が蓮湖に取材し、東岸・西岸の実景をそれぞれ１巻ずつにまとめたものである。絹本著色、各巻７m以上ある大作で、東岸は春景、西岸は秋景と異なる季節を題材とし、文久元年（1861）冬日に成ったと記される。加賀藩士・榊原拙処（1791〜1875）の序文によれば、「嶋崎某」氏の発注品であったらしく、向粟崎村に住んだ北前船の豪商・島崎氏に関わる可能性が考えられる。

泉玄による蓮湖真景之図としては、個人蔵の２巻（金沢市指定文化財）が古くから知られている。個人蔵本は紙本で、款記に文久元年秋日の成立とあり、当館本とは基底材が異なるとともに、制作時期が若干遡る。本作の存在は、泉玄の蓮湖真景之図をめぐる成立過程、更には当時の加賀藩領における真景図愛好の在り様などを検討する上で重要な意味をもつといえよう。

関連イベント

申込不要／要観覧料

学芸員による展示解説

日時：1月13日（土）
13:30～14:30
場所：企画展示室内

飛鶴文様打掛

雷鳥図屏風

赤穂浪士討ち入り図額

石黒傳六商店版木・印

2023年新収蔵資料

（受入順、敬称略）

資料名	点数	寄贈者
前田斉泰書幅	1	柴田　雄行
前田利鬯書幅	1	〃
アーサー・ディオシー著　久保田米僊絵 THE NEW FAR EAST（『新しい極東』）	1	（購入）
メイ・セイント・ジョン・ブラムホール著 JAPANESE JINGLES（『日本の小唄』）	1	〃
カール・フローレンツ著 三島蕉窓・鈴木華邨・新井芳宗・梶田半古・枝 貞彦画 DICHTERGRÜSSE AUS DEM OSTEN （『東の国からの詩の挨拶』独語版）	1	〃
カール・フローレンツ著 三島蕉窓・鈴木華邨・新井芳宗・梶田半古・枝 貞彦画 DICHTERGRÜSSE AUS DEM OSTEN （『東の国からの詩の挨拶』英語版）	1	〃
鈴木華邨筆「紫式部」	1	〃
鈴木華邨筆「松蔦之図」	1	〃
本多政通支配人持組中役旗等絵図	1	〃
溶姫君様附諸役人等書上帳	1	〃
長家切籠図	1	〃
産業と観光の大博覧会絵葉書	15	中川　安江
蓮湖真景之図	2	（購入）
馬図額（平成15、6年）	3	白山市野地町 八幡神社
馬図額（昭和32年）	2	〃
赤穂浪士討ち入り図額	1	〃
眼鏡・眼鏡容器	2	岡元　昭子
能崎清次写真	3	吉岡　光子
能崎清次記章	6	〃
木村浩従軍アルバム	6	石山久美子
木村浩関係写真	4	〃
満州関係写真帖	6	〃
旅順写真	9	〃
表忠録	1	〃
糸魚川尋常高等小学校卒業記念写真帖	1	〃
恩賜たばこ（缶入り）	1	〃
石黒傳六商店版木・印	143	石黒家
能登上布白絣長着	4	倉本　泰信
アイヌ風俗図屏風	1	杉本　静子
米谷家婚礼関係資料	36	米谷　隆久
雷鳥図屏風	1	津田千代子
明治期錦絵	一括	〃
防諜かるた	1	〃

資料紹介

加賀藩人持組士の指物

学芸主任　林　亮太

今年度購入した史料に「本多政通支配人持組中役旗等絵図」がある。同史料は、嘉永７年（1854）に加賀藩年寄（他藩の家老に相当）で人持組頭の本多政通が管理していた人持組士の指物などを描いたものである。指物とは、戦場において自分の部隊の目印にした旗や飾りもののことである。描かれた指物の種類は多岐にわたり、指物のほかにも羽織・笠などがあるが、役旗・役長柄・目印・腰指はほぼ全ての家でみられ、基本的に彩色で描かれている。

加賀藩の年寄は、前田家５代綱紀期に概ね成立し、本多家・長家・横山家・前田家（長種系）・奥村宗家・奥村支家・村井家・前田家（直之系）の８家の世襲であった。年寄は見習・加判・月番などに就いたあとに、人持組頭に就任した。人持組頭の職掌は、組士の遺書の管理や、組士の養子・婚姻願いをとりまとめ、御用番年寄に上申し、その結果を通達することなどであった。元禄14年（1701）以降、人持組士は７組に分かれており、人持組頭１人につき１組（約10家が属する）の人持組を管理していた。人持組士は、上は１万4,000石から下は1,000石で構成され、家老・若年寄・寺社奉行・各火消役などの役職に就いた。

表は、本史料から作成した本多政通が管理した人持組士である。組士の合計禄高は、29,500石である。全員5,000石以下で、それほど高い禄高の者はいなかった。元禄14年に人持組が７組編成になった時は、当時の本多家の当主政敏が管理した組の人持組士は７家であったが、嘉永７年時には表の通り11家になっている。元禄期以降、人持組士は増加傾向にあり、基本的に増えていった。本多家が管理した人持組も、表中の本多・上坂・永井・遠田が元禄14年の組分け後に組入りした家であった。

本多政通は、なぜ嘉永７年にこのような史料を作成したのだろうか。史料の奥書には、「此絵図帳嘉永六年下物ニ而入御覧候処、御指支之品抔ハ夫々以御加筆被仰出、来春御帰城之上清帳ニ認可指上旨被仰出候ニ付、翌年御帰城之上此之通ニ認奉差上候事（この絵図帳のもとになった嘉永６年の下書きを藩主斉泰にみせたところ、不備などを加筆され、来春の帰城時に訂正・清書したものを提出するようにいわれたので、翌年の江戸からの帰城時にこの通り提出した）」とある。本史料は、おそらく嘉永７年の江戸からの帰城時に藩主斉泰へ提出したものの控であろう。異国船来航が問題視されて以降、長い海岸線をもつ加賀藩では海防への関心が高まり、軍備の強化が考えられていた。軍役や有事の際に家臣・陪臣がもつ指物の種類・長さ・色などについても藩主斉泰と年寄、年寄内で議論・確認がおこなわれている（金沢市立玉川図書館近世史料館蔵「軍粧方筆記」）。泰平の世が長く続き、軍役・軍装の定の認識があやふやになっていたことがうかがえる。本史料は、こうした状況のなかで人持組士の指物類を改めて把握するために作成されたものであろう。

表　本多政通組の人持組士

名　前	禄　高	役　職
前　田　兵　部	4,000石	小松城番
松　平　潤　三　郎	4,000石	定火消
本　多　主　水	3,000石	出銀奉行
上　坂　蔵　人	3,000石	富来在番
小　幡　佳　太　郎	3,000石	無役
多　賀　典　膳	2,700石	天徳院請取火消
奥村源左衛門	2,700石	小松城番
松　平　数　馬	2,000石	宝円寺請取火消
小　幡　頼　母	2,000石	竹沢御屋敷鎮守等請取火消
永　井　志　津　磨	1,750石	新堂形請取火消
遠田勘右衛門	1,350石	算用場奉行

「本多政通支配人持組中役旗等絵図」（上坂蔵人の指物部分）

学芸員コラム
Column

仏像の展示と耐震のはなし

学芸主任　岡 崎　道 子

今夏の特別展「いしかわの霊場」（7/22～9/3）では、22躯の仏像資料を展示しました。これらはすべて木彫像ですが、当館がこれほどの規模で木彫像を展示したのは、平成31年度の「いしかわの神々」展以来でした。「いしかわの神々」展は神像中心の展覧会でしたので、仏像を多く展示したという意味では、平成19年度の「白山」展まで遡らなければなりません。毎年のように仏像メインの展示をしている博物館（美術館）に比べると、当館は仏像展示のノウハウや展示設備が不足していました。

こうした状況下での仏像展示はやはり大変で、事前に展示方法について綿密な検討を行いましたが、特に頭を悩ませたのが仏像の支持具でした。展示資料には平安仏など古い仏像も多く、お寺に安置されているときは安定しているように見えても、動かしてみると、絶妙なバランスで立っていたことがわかった、というような仏像がいくつかありました。

例えば立像の場合、足裏に枘（突起）が付いており、これを台座の枘穴に差し込んで固定する場合が多いのですが、経年劣化で穴に枘がぴたりとはまらなくなると、像が傾いてしまいます。坐像の場合では、多くは体幹部（胴体の部分）と膝前（脚部）を別々につくり接合するのですが、この接合が脆くなってくると体幹部が安定しません。長い年月を耐えた仏像には、普段安置されている場所でだけ安定するものが少なからずあります。

弥勒菩薩坐像　珠洲市 翠雲寺蔵　珠洲市指定文化財

体幹部と膝前を木材で固定しているが、
反対側は固定が外れてしまっている。
体幹部はしっかり直立するものの、
安全のため固定具を使用した。

さて、お寺と展示室では周囲の環境も異なりますし、より近くで仏像をご覧いただこうとすると、どうしてもお客様と仏像との距離が近くなります。万全を期すため、不安定な仏像については支持具を取り付けたのですが、どんな支持具にするのか、一つ一つの仏像について個別に検討しました。

二天王立像　阿形像　輪島市 岩倉寺蔵

後方へ傾くので、
後ろから柱状の支持具で支えた。
台座は像と同時期の作とみられる。

大型の坐像では背面にボードを設置し、そこにL字状の金具を取り付けて像を固定しました。固定する場所は像が傾いた際に確実に支えることができる箇所を選びますが、傷んでいるところや鑑賞のポイントとなる部分は避けなければならず、判断に苦労しました。

立像では台座が機能しなくなっている仏像もあり、枘の形に穴を空けた展示台を作成して対応しました。また古い台座を伴う立像には、像の枘が台座にぴたりとはまらず、像が後ろに倒れそうになっているものがありました。この像は台座ごと展示するために、像の背後にボードを立て、そこから柱状の支持具を伸ばして後ろから像を支え、支持具と像を固定しました。

本展に先立つ令和５年５月５日、奥能登地域は大きな地震に見舞われましたが、出品された仏像に倒れたものは無かったそうです。長い年月を経てきた仏像の貫禄を感じずにはいられませんが、やはり年々傷みは進行しますので、安定性を欠く資料については適切な修理が望まれます。修理には多額の費用がかかり、所蔵者の方々にとっては大変な負担となりますが、こうした仏像の存在が多くの人に知られることで、修理への足掛かりになるのではないかと思います。「いしかわの霊場」展がそうした足掛かりの一つとなり、地域の文化財保存に少しでも貢献できればと願ってやみません。

研究ノート

刀工清光にまつわる逸話

学芸課長　大井　理恵

加州刀工のうち清光は、古刀期から新々刀期まで暫定十三代[1]を数える。歴代の中で最も有名なのが新刀期の「非人清光」[2]であろう。今回は「非人清光」について整理するとともに、加賀藩主前田綱紀との逸話について取り上げ、未だ謎多き刀工について紐解く手がかりとしたい。

1　清光は定説により十三代を数えるが、この代数は藤江家（清光の家系）の由緒書とは異なり、特に古刀期においては不明な点が多いため「暫定」とされる。本稿における清光の代数も全て暫定とする。
2　「非人清光」は歴代清光のうち加賀藩の貧民救済施設「非人小屋」にいた者、またはその清光が打った刀を指す通称。近世から刀剣書等に見られ、刀工研究では広く知られている。現在の人権感覚からすれば適切とは言えない表現であるが、本稿では清光についてその歴史をふまえて理解してもらうために「非人」の語を使用するものであり、差別を容認するわけではない。

一、「非人清光」とは誰か

まずは「非人清光」について整理しよう。この通称は、江戸時代前～中期の清光が笠舞村に設置された加賀藩の貧民救済施設「非人小屋」に入り、そこで作刀したことに由来する。小屋に収容された人は「非人」と呼ばれたが、これは「困窮した農民・町人」の意味とされる。「非人清光」と言えば、圧倒的に多くの作が残り、評価も高い六代長兵衛清光（貞享４・1687年没）、またはその作品を指す場合が多いが、実は小屋で作刀した清光は一人ではなく、記録から、六代長兵衛、七代長右衛門、八代長兵衛の三代とするのが正確である。

貞享４年の金沢町会所留記には、六代長兵衛は飢餓のため小屋入りを願い出た、とある。長兵衛が小屋入りした時期は、藩が小屋を設立・稼働した寛文10年（1670）夏頃から延宝元年（1673）までの間とされる。小屋設置の目的は、寛文８～９年（1668～69）に加賀・越中を襲った大規模な豪雨・洪水とそれによる飢饉で出た困窮民を収容するためであった。清光は、新刀期に台頭した他の刀工との競争で作刀仕事が減少、さらに飢饉の影響を受けて窮乏したとされる。一家が金沢町に復帰するのは八代長兵衛（宝暦４・1754年没）の頃であり、実に半世紀以上を小屋で過ごしたことになる。

「非人清光」の語は、江戸時代に刊行された刀剣書にも見える。ただし、その実態までは把握されていなかったようで、「非人清光」と「播磨大掾清光」を混同することが多い。播磨大掾清光（寛文期・1661～73年頃活躍）は当時業物として評判であったが、加賀の系統から派生した越中清光の一人で、「非人清光」とは別人であることが明らかになっている。

六代長兵衛清光の作
脇差　銘[表]加州金澤住藤原清光作
江戸時代前期（17世紀中頃）本館蔵
撮影：大塚巧藝社

二、綱紀と清光の逸話

さて「非人清光」（六代長兵衛）については、窮乏のために小屋入りし、前田綱紀がその技量を惜しんで手厚く保護した、という逸話がしばしば語られる。例えば笠舞にある清光碑の碑文にも、「刀鍛冶長兵衛(藤)原清光は名利の道に疎(く)窮乏の末延寶年間ここ(に)移った　彼は清光の(六)代目で歴代の中でも名(工)であり藩主はその技倆(を)惜しみ度々鍛刀を命ぜ(ら)れたが彼もまた貧中礼(節)を忘れず貞享四年に(没す)るまで造刀に専念した」[3]と、綱紀と長兵衛の関係を示唆する一文が添えられる。碑文では長兵衛清光の性情について「名利の道に疎く」

と表現しているが、一般には「職業に励まず悠々手を懐にして徒食を恣（ほしいまま）に」した、つまり仕事に励まず勝手気ままに生活していた、それが災いして窮乏し小屋入りした、と語られることが多い。歴代の中でも抜きん出て作例が多い長兵衛の評として違和感があるが、なぜこのような人物像が伝わるのか。逸話が流布するのはどうやら明治末期、綱紀の事績顕彰を契機とするようだ。

『加賀松雲公』（近藤磐雄著 明治42・1909年）は、「其技頗る精巧なりと雖も、寛文飢饉の比終に非人小屋に入るに至りたり。公聞て之を愍み、特に其父子三人に各米七合五勺を賜ひ、別に其妻及幼児に物を與へ、薪炭等を給して業を執らしめらる。」と、長兵衛への待遇は綱紀の温情であったとする。藤江家由緒などから長兵衛が藩の仕事を請け負っていたことは間違いなく、小屋内における給米の量などで一家が厚遇されていたことも事実であり、その点を誇張したものだろう。一方、同年北國新聞に連載された記事「非人小屋」の第６回では、長兵衛について「藤島友重以後六代相伝の名工であって手腕もとより出藍の誉を有し鍛ふところの刀剣一度び鞘を脱せんか、紫電一閃光鋩陸離、肝胆忽ち寒き業物であれど斯る名工にあり易い癖として職業に励まず悠々手を懐にして徒食を恣にせしため、生計の困難は常に身辺に附随して後日に備ふべき貯蓄もなく云はば其日暮しに終っていた折柄、大飢饉に逢って武家も倹約に倹約を重ね、刀剣の注文もすくなくなり落魄の極遂に御小屋へ這入ったのである。松雲公之を聞かれ絶世の技を有する清光を愍まれ、特にその父子三人に各白米七合五勺を賜ひ別に妻と幼児には物を給せられ、薪や炭をも添えて鍛冶の業を執らしめられた。」と語る。この記事は筆者を明記しないが、綱紀の事績顕彰を目的とした『加賀松雲公』の流れに連なるものと理解できる。

これ以降、類似の逸話が散見されるようになる。大正９年（1920）に最後の清光（十三代清一）を取り上げた「名工清光の末孫（上）」（『北國新聞』６月25日）にも「名工非人清光の持って生れた性格は何でも余っ程磊落な男で、明日食べる生活の資料なんて清光にとっては問題でなかった、只何よりも好きな囲碁にばかり耽（ふけ）て居たものの刀剣鍛冶には非常に冴え切った非凡な腕を有（も）って居た。其の磊落な性格は遂に清光をして窮乏の極に達せしめた、松雲公の刀剣鍛冶をしていた関係上殿の厚い情けで、（以下略）」とあるなど、影響が読み取れる。磊落な性格ながら天才的な腕をもつ刀鍛冶、という六代長兵衛の人物像は、「非人清光」の通り名と、作刀の技量の高さをもとに一種の偶像化によって生まれたと見るべきだろう。さらに言えば、藩主の事績を称える動きの中で、綱紀の名君ぶりがより強調されるよう性格付けがなされたとも考えられる。

ちなみに「非人小屋」の連載（全７回）は明治42年10月で、その直前には同じ筆者と見られる「加賀神社」（全３回）がある。明治41～42年頃、近藤磐雄らは津幡町潟端の諏訪神社（現加賀神社）がもと綱紀の生祠であったとし、祭神に綱紀を迎え、社名を「加賀神社」改めるなど、石川県に働きかけて整備を行っていた。潟端はもと潟端新村といい、延宝元年の河北潟縁干拓によってできた新村で、笠舞の小屋から里子を入植させ、新田開発を進めた。つまり綱紀の功績によってできた村であり、「非人小屋」の設立・運営とも結びついている。明治42年10月頃というのは、加賀神社の県社への昇格、社殿新築等を目指してさらなる働きかけを行っていた時期であり、これらの連載はまさにその機運醸成のために執筆されたものと考えられる。読者の心をつかむために、脚色に富んだ綱紀と清光の逸話ができたと見るべきだろう。

３　（　）内は石碑補強具のため現在は判読不能。『加州新刀大鑑』（日本美術刀剣保存協会石川県支部・1973年）25頁を参考に補った。

「非人清光」にまつわる逸話は後世まで影響し、刀工清光にまつわるイメージを形成しているとも言える。しかし、清光の系統について特筆すべきなのは、他の刀工の盛衰をよそに近代まで刀鍛冶の家系を守り抜いたことではないだろうか。十三代清一は、「時代は武士の末路ではあったけれども父から『清光家の誇りを汚瀆するな刀鍛冶の家柄を亡ぼすな』と警められて、断乎時代に叛いて今日まで来たのです。」と語る（『北國新聞』大正14・1925年６月13日）。約五百年にわたり実直な活動を続けた刀工として再評価されるべきであろう。

加賀神社
（令和５・2023年８月撮影）

主要参考文献：丸本由美子『加賀藩救恤考ー非人小屋の成立と限界』（桂書房・2016年）
金沢市図書館叢書（五）『温故集録 二』
（金沢市立玉川図書館近世史料館・2005年）

催し物案内 Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

12月　休館日：12/15(金)・12/28(木)～12/31(日)

7日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「蝦夷穴古墳が造られた時代」講師：三浦 俊明（当館資料課長）

21日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「加賀能登の荘園」講師：岡崎 道子（当館学芸主任）

1月　休館日：1/1(月)～1/3(水)・1/22(月)

11日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「加賀藩の参勤交代」講師：吉田 朋生（当館学芸員）

18日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「能登をめぐる ― 幕末における能登風景図の制作 ―」
講師：中村 真菜美（当館学芸主任）

2月　休館日：なし

1日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「加賀藩の家臣団構造」講師：林　亮太（当館学芸主任）

8日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「神々をもてなす ― 能登の神饌文化と来訪神行事 ―」
講師：大門　哲（当館学芸主幹兼普及課長）

15日(木)　いしかわ歴史講座　聴講無料／申込不要
「歌舞伎文化と加賀・能登の曳山」
講師：大井 理恵（当館学芸課長）

3月　休館日：3/18(月)・3/19(火)

令和6年度 れきはくメイト会員募集

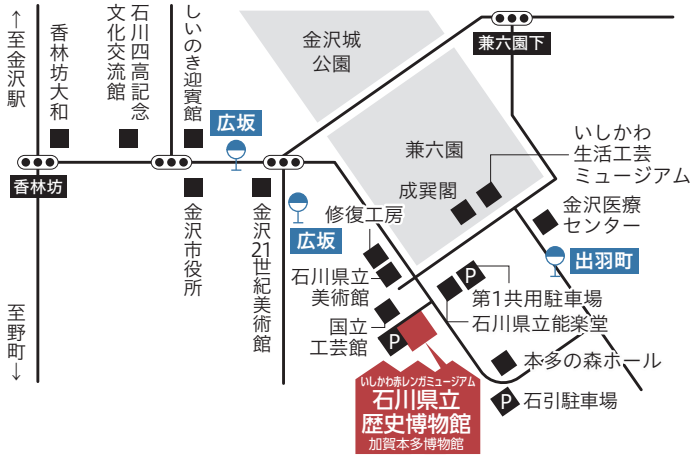
3月1日（金）より、令和6年度「れきはくメイト」の新規・更新受付を開始します。
「れきはくメイト」とは、石川県立歴史博物館をより身近なものとしてご利用いただくための組織です。ご入会いただくと、入館料割引や会員限定イベントへの参加、最新情報の送付など様々な特典があります。

会　費　1,500円（大学生以下750円）
※10月以降のご入会は一般750円となります。

特典例
1. 会員証提示により、当館の常設展示を無料で観覧できます。
2. 会員証提示により、当館の特別展を団体料金で観覧できます。
3. 当館の最新情報を会員限定の情報紙でご案内します。
4. 当館が主催する会員限定イベントに参加できます。
5. 会員証提示により、当館発行の図録やオリジナルグッズを10%割引で購入できます。

申込方法　来館もしくは郵便振替でのお申込みとなります。

お問合わせ　当館HPもしくは普及課(076-262-3417)までお問い合わせください。



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/

広告
石川県立歴史博物館
「石川れきはく」
に広告を掲載してPR サービス・集客 しませんか？
れきはくメイト（友の会）会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ 配布!!
ターゲットを狙った 知名度向上
石川県立歴史博物館の 信頼度の高い 広報媒体
お問い合わせは 株式会社ジチタイアド ☎092-716-1401 代表
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F 財源確保 検索
※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。